



# 千葉労働動向



灰色の大海原の上で風は雨雲を吹き集めている。雨雲と海の間を海燕は、黒い稲妻のように誇らしげに飛びかっている。……つばさを波にふれたかと思うと、矢のように雨雲をさして舞いあがりながら彼は叫ぶ。……激怒の力強さと、情熱の炎と、勝利の確信を雨雲はこの叫びのなかに聞く。……かれは歌いながら雷鳴にむかって高く高きかまく。……かれは確信しているのだ。雨雲は太陽を蔽い隠しはしないことを、否、蔽い隠しはしないのだ。——嵐だ！嵐がやってくるぞ！これは勝利の予言者が叫んでいるのだ！——嵐よもっとはげしくとどろけ……と。

——ユーリキ——海燕の歌より

## 嵐を前にして……

風が雨雲を吹き集めている。戦後半世紀の世界の枠組みが根本から揺らぎ崩壊し始めてきている。堆積した矛盾が沸騰点に達し、噴出口を求めて逆まいてきている。嵐を前にしてすべてが待機状態にある。

死の病に苦悶する資本主義体制は、危機感を隠そうともせず、日米安保条約の抜本的な改悪を強行し、「生命線」アジアを抑えるためには軍事力行使も辞さないという軍事外交政策にふみ切った。そして、今、「経済社会の抜本的な構造改革」の大合唱が始まっている。「当面の痛みを先送りして従来の延長線を歩む余裕は我が国にはない」(行政改革会議報告)と言うのだ。日本に十数年先だつて規制緩和が進んだアメリカの現状は、次のように報

告されている。△要するに規制緩和とは、これまで公平なアンパイアのいたゲームからアンパイアをのけてしまうということだったのです。ゲームは混乱し、何でもありの世界になりました。倒産の激増。寡占化の進行。労働者の辛酸。少数の経営者への莫大な富の集中。そして経済学者がたてた仮説の「破綻」「日本の規制緩和運動は、いわば、大変危険な劇薬を患者にその副作用を知らせずに投与しようとしているのと同じ」と。——要するに、労働者に膨大な失業と権利・福祉・社会保障制度のはく奪を強制し、戦争のできる国家を作ろうというのだ。

## 闘いのときは今！

労働者も今のところ待機状態にある。しかし、生活の隅々までもが、「大失業と戦争の時代」に侵され、時代への危機感が満ち始めている。もっとも身近な問題も、社会構造とのかかわりぬきには全く語れないことに気づき始めているのだ。これまで信じられてきた価値観や社会のあり方が崩壊する状況のなかで、虫けらのように扱われようとしている労働者の怒りが溢れだすことは避けられない。

昨年秋、フランスの労働者は、一二・六%という膨大な失業率のなかで再びゼネストに立ちあがり、ストとデモの熱い師走を過ごした。「運動は全社を包み、そのなかで高まっているのが『反政府』ではなく『国家不要』という声だ」という。

九七年は、日本でも、未だ待機状態にある一切の矛盾が、激しくしぶきをあげながらせめぎ合い、ぶつかり合う年となるであろう。

ひとつの時代の終わりは、新たな時代の建設の始まりを意味する。われわれは、時代の声を聞き、昨年十一月一日、全国に闘いの呼びかけを発した。沖繩からも、日米の支配体制を揺るがす闘いが燃えひろがった。この闘いを燎原の火のように燃え広がせよう。

## 三番目の変革期！

われわれは、時代の大きな転換点にたちあつてきている。歴史は、明らかに「明治維新」「敗戦」に継ぐ三番目の変革期に入った。

維新の志士は、「鬼神の如き政府と雖も人力をもつてこれを倒す可きを悟るに到れり」と記している。「改革の乱を好む者は智力ありて銭なき人なり……何処より発したるとも知れず、不図新奇なる説を唱えだして、何処となく世間に流布し、……遂にこの説を認めて国の衆論と為し、天下の勢を圧倒して鬼神の如き政府をも覆したることなり」。二七〇年も続いた、ほとんど自然の磐石のごとき幕府も、人の力で変えることができるのだ、という認識が衆論となったとき、「天下の勢を圧倒した」のだ。

労働運動の新しい潮流を創ろう、労働者の新しい党を創ろう、という動向千葉の呼びかけは、今、「不図新奇なる説」ではなく、多くの労働者が心に響き始めている。多くの労働者が「このままおし流されたら大変なことになる」と切実に思い始め、闘いの指針を求めている。

## JR総連解体の年に

分割・民営化攻撃から十年。国鉄闘

争もいよいよ正念場だ。十年という歳月は、ひとつの時代に区切りをつけるにも充分な時間の流れである。しかし、われわれにとってこの十年は、決して過去に繰り入れることのできない現在そのものだ。なぜなら、激しく火花を散らして闘った一切の課題が、そのままだま今日まで継続しているからだ。十年間、われわれが挑みつづけた闘いが、分割・民営化攻撃を過去のこととするのを許さなかつたのである。

結局、十年を経て矛盾を抱えきれなくなったのは敵の側であった。JR体制は、あらゆる面から解決不可能な矛盾を噴きだしている。この十年、「使え捨て」に怯え、抗争と分裂に明け暮れたJR総連・革マルは、組織崩壊への恐怖もあらわに、「国労解体」を唯一の方針とした。

当面激しい攻防戦が続くことは間違いない。暮もおし迫った二〇日、二進も三進もいかないJR貨物の経営破綻を背景として、佐倉機関区の廃止提案が行なわれた。「国鉄改革」が大失敗に終わった犠牲をあくまでも労働者に転嫁しようというのだ。絶対に許すことはできない。しかしわれわれは、国鉄闘争が、大失業時代に抗する労働運動の再生の道すじを照らすことを確信している。勝利の展望ははつきりと見えてきた。われわれは、今年、十年間の攻防戦の決着を求めて、組織の総力をあげてJR総連解体—組織拡大、佐倉機関区死守の闘いに立ちあがる。

労働者の力こそが歴史を築く。恒常的なストライキ体制を堅持し、危機にたつJR体制を打倒しよう。国鉄—安保・沖繩闘争の高揚のなかから、大失業と戦争の時代をはね返す労働運動の新しい潮流を創ろう。

一九九七年一月一日

国鉄千葉動力車労働組合 執行委員会